

早稲田大学とコロンビア大学との協同で行われた今回のシンポジウム・ワークショップを通して、私は二つの大きな経験を得ることができた。

第一にコロンビア大学において自身の研究を発表し、コロンビア大学の先生方や学生たちと議論を行う場を持つことができたことである。2日間におよぶシンポジウム・ワークショップは、自身の研究を米国の研究者や学生らとの討議によって国際的な視点から捉え直すきっかけとなっただけでなく、コロンビア大学の学生がどのような方法論で研究をおこなっているのかを知る機会になった。またそこから、両国における日本研究の相違を理解・議論し、自身の研究にフィードバックすることもできた。また、コロンビア大学の教員や学生と単純な学会発表を超えた密な交流を行い、関係を構築することもできたことも得難い経験であった。丸二日間にわたるシンポジウム・ワークショップでは発表以外にも、コーヒブレークやディナータイムなどお互いの研究に対する考え方や意見を率直に交換することが出来る時間も多くあり、日頃考えていた互いの素朴な疑問を投げかけ合うことができる貴重な機会でもあった。このような時間も、自身の研究を国際的な視野で再考し、今後発展させていく上で極めて重要な経験であったように思う。

また、第二に国際的なシンポジウム・ワークショップにおいて日本文学と日本美術が同じ一つのイベントにおいて意見交換や交流を行うことができたことも得難い経験であった。国内の研究環境においては全くの異分野であり、意見交換をおこなうことのほとんどない日本文学と日本美術が、「国際日本学」という枠組みにおいて問題を共有することができたことはとても興味深かった。これまでその考えや方法論が共有されることのなかった研究領域が、国際シンポジウム・ワークショップという機会です際的に交流することが出来たように思う。具体的には、日本美術の研究者の資料に対する考え方やヴィジュアルの観点に基づいた分析方法の差異など、文学研究者たちとの交流だけでは得られない経験をすることができた。

今回、コロンビア大学で行われた2日間のシンポジウム・ワークショップは、学問領域を超えたコロンビア大学の先生方や学生たちと密な交流を通して、自身の研究を国際的・学際的に捉え直し、今後自身の研究を新たな形で発信・発展させていくための貴重な経験となった。